

令和 2 年 6 月 10 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K03086

研究課題名(和文)近代東アジアの歴史教科書 「東アジア史」教科書を中心に

研究課題名(英文)East Asia's History Textbooks during Modern Age: Focusing on "East Asian History" Textbooks

研究代表者

土屋 洋(TSUCHIYA, Hiroshi)

名古屋大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：00644931

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、東アジアにおける人びとの歴史認識の形成にあずかって力あった歴史教科書を考察の対象として、人々の歴史認識の変遷を辿ろうとするものである。  
本研究によって、従来の研究ではまったくの手つかずであった清末の「東アジア史」教科書の日本史認識を明らかにし、また日中戦争下の重慶国民政府によって編纂された国定歴史教科書中のアジア認識について初步的な分析結果を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、中国の近代歴史教科書の草創期から日中戦争期までを見通すことを可能とし、東アジアの人々の歴史認識の変遷を辿る上で、主要な基礎を提供するものである。  
また、本研究は、東アジア諸国間において歴史認識問題として衝突を招きがちであった相互のアジア認識の歴史を解きほぐし、未来の「東アジア史」を構想する上で一つの糧を提供しうるものでもある。

研究成果の概要(英文)：This study aims to trace the history of people's history recognition by considering the history textbooks that were powerful in forming the history recognition of people in East Asia.

This study clarified the Japanese history recognition of the "East Asian history" textbook at the end of the Qing period, and the Asian recognition in the national history textbook compiled by the Chongqing National Government during the Sino-Japanese War period.

研究分野：中国近代史

キーワード：東アジア史 歴史教科書

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19（共通）

## 1. 研究開始当初の背景

近代東アジアの歴史教科書をめぐっては、これまで日本の歴史教科書について、そのアジア認識を検討する研究が存在する。また、日本の東洋史教科書についても、そのアジア認識や中国の教科書との関わりについて、すでに開拓者的研究が存在する。

しかし、中国の教科書については、従来、史料の利用が容易ではなく、研究は十分進展してこなかった。近年、ようやく状況が好転し、王建軍『中国近代教科書発展研究』（広東教育出版社、1996年）を先駆として、徐冰『中国近代教科書中の日本和日本人形象』（商務印書館、2014年）といった注目すべき研究が現れている。また日本でも、中国近代教科書研究の専著・並木頼寿他『近代中国・教科書と日本』（研文出版、2010年）が現れている。

この他、日本の統治下にあった植民地教科書の研究については、磯田一雄『「皇国の姿」を追って 教科書に見る植民地教育文化史』（皓星社、1999年）を始めとして、台湾や「満洲」等の植民地教科書についての包括的な研究が進んでいる。

総じて、中国の歴史教科書については、近年ようやく史料状況が好転し、注目すべき研究が現れつつあるものの、歴史教科書をめぐる研究はなお緒についたばかりである。とりわけ、今日まで東アジア諸国間において歴史認識問題として衝突を招きがちであった相互のアジア認識をめぐっては、その変遷を辿る系統的な研究はまだ存在しないといつてよい。

## 2. 研究の目的

本研究は、こうした背景の下、東アジアにおける人びとの歴史認識の形成にあずかって力あった歴史教科書を考察の対象として、人々の歴史認識の変遷を辿ろうとするものである。とりわけ、近代の日中を中心とし、さらに台湾、朝鮮、「満洲・満洲国」等日本の勢力下にあった地域において編纂された歴史教科書の調査・蒐集・分析を通じて、歴史認識のあり方やその相互の関連等について考察を行う。

その際、本研究では、とりわけ「東アジア史」教科書を主たる考察の対象とする。というのも、一方では、日本の「東洋史」教科書が20世紀初頭の中国で多数翻訳され、草創期における中国の教科書に小さからぬ影響を及ぼしたのであるが、また他方では、日本の膨張にともない、その勢力下では「日本史」を超え「中国史」を相対化する「東亜史」が構想され、それに対する中国側は「中国史」をもって対抗する、という攻防が東アジア史を舞台に展開したからである。

本研究は、このように日中を中心とした交流と対抗のなかで生み出された東アジア史教科書の具体像を明らかにし、そのアジア認識の変遷を辿ることを通じて、未来の「東アジア史」を構想するための糧を得ることを目的とする。

## 3. 研究の方法

本研究は、こうした目的を、以下の方法を通じて、達成したい。

まずは、史料となる教科書の調査と蒐集である。中国の教科書については、近年、目録の出版やデジタル資料が利用可能となったことで、その全貌への接近が可能となりつつある。とりわけ、日中戦争時期に日本の傀儡政権によって出版された教科書や同時期に重慶で出版された国定教科書については、これまでまったくと言ってよいほど手つかずの状態であったが、これら史料の少なからぬ部分について、現在、調査・蒐集が可能となっている。

次に、こうした史料の調査・蒐集の基礎の上に、上述の通り、「東アジア史」をめぐる日中間の教科書上の攻防について考察を行う。その際、特に日中の対立が尖鋭化した30年代以降に焦点をあてて研究を進めたい。日中間の教科書をめぐる対立が顕在化するのには両者の主権が重なった「満洲」においてであったが、とりわけ「満洲国」が成立すると、「中国史」を換骨奪胎した「東亜史」教科書が編纂され、一方の中国側は「抗日」を前面に出した「中国史」教科書をもってそれに対抗した。こののち日中戦争時期に至ると、日本占領下の傀儡政権と重慶国民政府との間で「東アジア史」をめぐる攻防はさらなる展開を示したと推測される。本研究では、これまでほとんど手が付けられてこなかったこれらの教科書の具体相を明らかにし、「東アジア史」をめぐる日中の攻防をその結末まで跡づけたい。

## 4. 研究成果

以上の目的、方法に従って、研究を進めることで得られた成果は、以下の通りである。

まず、初年度である平成28年度は、史料の調査・蒐集を重点的に行った。日本の教科書については、東洋史教科書関連の史料を中心に調査・蒐集を行った。国立教育政策所附属教育図書館において、「大東亜史」関係の史料を調査・蒐集した他、近代中国の「東アジア史」教科書に影響を与えたであろう日本史教科書の調査を行い、成果を得た。また中国の教科書については、30年代以降の歴史教科書の調査・蒐集を重点的に行った。北京大学図書館、大連図書館、国立国会図書館関西館で歴史教科書ならびにその関連史料の調査を行い、教育総署編審会著『高小歴史教科書』（1940年）といったいくつかの重要な歴史教科書を蒐集しえた。

次に、平成29年度は、初年度に行った史料調査・蒐集を継続する一方で、研究の重点を史料の分析・論文の執筆へと移した。史料調査・蒐集については、台湾で歴史教科書関連の史料を中心に調査・蒐集を行い、国立台湾図書館等で台湾総督府編纂日本史教科書ならびに関連の史料等を蒐集した。また、東京大学東洋文化研究所等で、「満洲国」文教部編纂の東亜史教科書、国史教科書等を蒐集した。史料の分析・論文の執筆については、清末期の中国で編纂された「東アジ

ア史」教科書について、その日本史認識ならびに日本の東洋史教科書、日本史教科書との関係を考察し、論文を公表した。また、日本における東アジアの歴史教科書に関する研究を概観する読書案内を公表し、本研究に関係する日本語文献の整理を行った。

さらに、平成 30 年度は、初年度および第二年度に行った史料調査・蒐集に基づき、史料の分析を研究の中心に据えた。まず、論文の作成については、清末期の中国で編纂された「東アジア史」教科書について、中国語による論文を作成し、中国・長沙で開催された教科書研究の国際シンポジウムで発表した。さらに、上述の成果に基づいて、韓国・ソウルで開催された講演会で講演を行った。また、上記の成果を含む、本研究で得られた中国の歴史教科書についてのより広い知見に基づき、中国・湘潭で開催された国際シンポジウムで講演を行った。さらに、成果の社会への還元と国際的な研究交流・協力の促進を目的として、中国の教科書研究の代表的研究者を複数名招待し、日本ならびに第三国の研究者の参加も得て、東アジアの教科書をめぐる国際研究集会を名古屋で開催した。

最後に、最終年度である令和元年度は、第三年度までに進捗状況に遅れを生じた部分について、補完的な研究を行った。まず、第三年度に作成し、国際シンポジウムで発表した論文について、必要な修訂を施し、著書（共著）として公表した。次に、第三年度までに蒐集した 1930 年代以降に中国で編纂された歴史教科書について初歩的な分析を終え、日中戦争下の重慶国民政府によって編纂された国定歴史教科書に関する成果を名古屋で開催された研究会で報告した。さらに、この成果を含む、本研究で得られた中国の歴史教科書についてのより広い知見に基づき、中国・杭州で講演を行った。最後に、清末期の中国の歴史教科書に小さからぬ影響を及ぼした那珂通世『支那通史』の上海翻刻本に附された王国維「重刻支那通史序」等三篇を、その本研究における重要性に鑑み、詳細な注を附して訳出・発表した。

総じて、主要な史料を収蔵する機関での調査が許可されなかった等の理由で研究の方針を一部変更し、また進捗に遅れを生じたものの、現時点で、雑誌論文 3 件、学会発表 6 件、図書 1 件の成果を得ることができた。なかでも、従来の研究ではまったくの手つかずであった清末の「東アジア史」教科書の日本史認識を明らかにし、また日中戦争下の重慶国民政府によって編纂された国定歴史教科書中のアジア認識について初歩的な分析結果を得られたことは、中国の近代歴史教科書の草創期から日中戦争期までを見通すことを可能とするものであり、本研究の目的である東アジアの歴史教科書を考察の対象として、人々の歴史認識の変遷を辿る上で、主要な基礎を提供するものである。これはまた、東アジア諸国間において歴史認識問題として衝突を招きがちであった相互のアジア認識の歴史を解きほぐし、未来の「東アジア史」を構想する上で一つの糧を提供するものでもあろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 土屋 洋	4. 巻 17
2. 論文標題 清末の「東アジア史」教科書：その日本史認識を中心として	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 文化共生学研究	6. 最初と最後の頁 105-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） info:doi/10.18926/55798	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 土屋 洋	4. 巻 711
2. 論文標題 読書案内 東アジアの歴史教科書（世界史の研究(254)）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 歴史と地理	6. 最初と最後の頁 39-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 土屋 洋, 王 天驕, 梅津 幹, 鹿島 梨奈, 下田 梓	4. 巻 44
2. 論文標題 訳注 中国近代史学論文選訳注：王国維代撰「重刻支那通史序」等三篇	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 名古屋大学東洋史研究報告	6. 最初と最後の頁 101-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 5件／うち国際学会 2件）

1. 発表者名 土屋 洋	
2. 発表標題 清朝末期の東アジア史教科書	
3. 学会等名 成均館大古典学連携専攻第4回名士招待講演会（招待講演）	
4. 発表年 2019年	

1．発表者名 土屋 洋
2．発表標題 清末“東亜史”教科書考論：以対日本史の認識為中心
3．学会等名 第六屆教科書國際學術研討会（招待講演）（國際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 土屋 洋
2．発表標題 清末歷史教科書研究
3．学会等名 “社会変遷、学生発展与教科書”國際論壇（招待講演）（國際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 土屋 洋
2．発表標題 重慶国民政府の歷史教科書
3．学会等名 中国現代史研究会東海地区例会
4．発表年 2019年

1．発表者名 土屋 洋
2．発表標題 清末歷史教科書与日本歷史教科書
3．学会等名 教育部浙江大学基礎教育課程研究中心、浙江大学教科書研究中心 Seminar No.9（招待講演）
4．発表年 2019年

1．発表者名 土屋 洋
2．発表標題 抗戰時期中国的歴史教科書
3．学会等名 教育部浙江大学基礎教育課程研究中心、浙江大学教科書研究中心 Seminar No.10（招待講演）
4．発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1．著者名 石鷗，張増田他	4．発行年 2019年
2．出版社 首都師範大学出版社	5．総ページ数 286
3．書名 教科書評論2018	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
--	---------------------------	-----------------------	----